

ホンダラケ緊急討論会 魔法のファンタジー

F「今月のテーマはズバリ読書なのですが。みなさん、ハリーポッターはどんな風に読まれましたか？」

A「私はズバリ、ハリポタ世代ですー。周りもみんな読んでいましたし、発売に合わせて本を買いに行ったりしました！」

M「私が読んだのは大人になってから。えらい流行ってるらしいよ〜ってことで、じゃあまあ読んでみようかと」

A「どうでしたか？」

M「ん〜〜〜。2巻くらいまでは面白かったんだけど。なんかね、児童文学にしては人が死にすぎじゃない？ これを児童文学って言っちゃダメだと思う」

A「みんなが幸せ、というおはなしが M さんの児童書のイメージなんですね」

M「そうそう、やさしい世界」

F「なるほど、け●のフレンズ」

A「でも、人が死ぬ児童文学ってけっこうあると思いますよ。ほら、ダレンシャンもそうですし」

M「ダレンもハリーも、児童書っていうか、児童書は卒業するけど大人の本を読むのもまだアレだな〜という世代のためのジャンルだと思うのよね。まあ、つまり我々が YA(ヤングアダルト)の出番。昔は児童文学で『魔法』とかいうとキキとかプ●キュアみたいなお話が多かったけど、今の魔法少女ってけっこう大人向けなものもあるよね。魔法=児童書じゃない」

F「……まど●ギ？」

A「あ、確かに。でも最近はまだ魔法少女っていうより、異能系ファンタジーの方が多い印象がありますね。ファンタジーというより、SF チックな」

F「流行が去ったのかなあ」

M「私が若かりし頃の魔法といえばミ●キーモモとか！ クリーミーマ●とか！」
(Mさんと周囲の司書がドヨめく)「なつかし〜〜〜！！！」

A&F「「・・・なんですかそれ？」」

M「昔のアニメ。モモちゃんが魔法で大人になって大活躍するのよ〜♡」

司書 S「でも、ミ●キーモモもけっこう衝撃的じゃなかった？」

M「うん、『あのシーン』ね。子供心に、え？ って見た覚えがある。てことは魔法少女のヤバさって今に始まったことじゃないのかも。平成世代も見てみて」

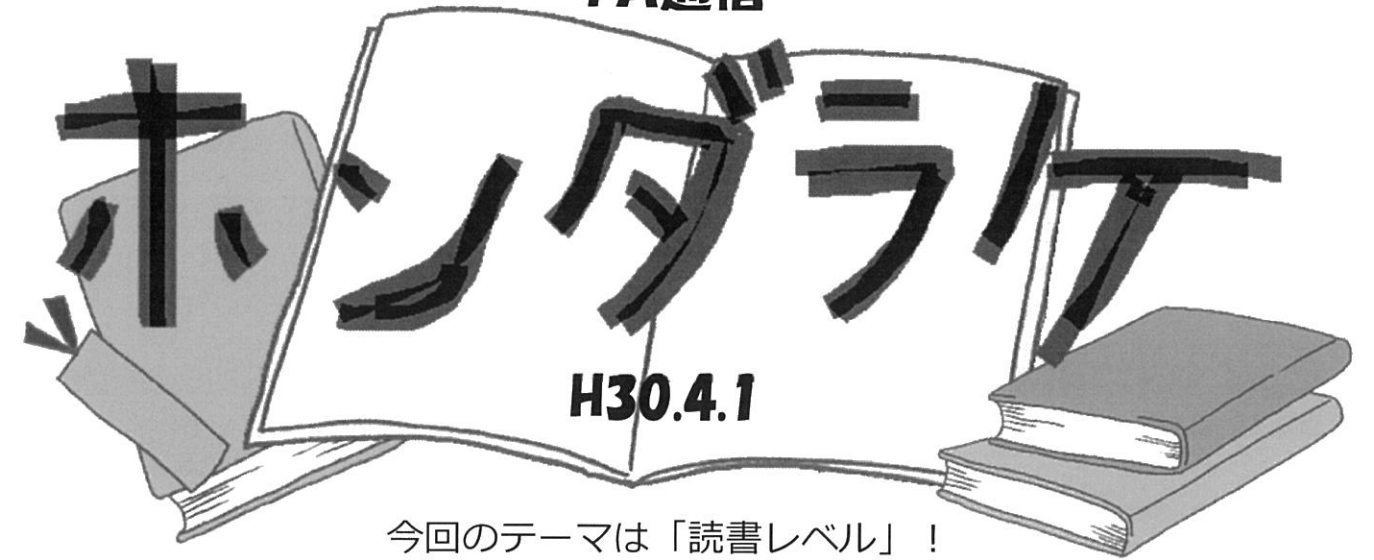
F「えーっと……」

(わいわいしている M 先輩と同世代の仲間たち)

F「……対談は？」

A「ま、魔法少女は全世代の青春ということ……ですね？」

←続きはブログで！ <http://sanda-city-lib-ya.sblo.jp/>



今回のテーマは「読書レベル」！
世の中には読みやすい本から難解な本まで星の数ほど本がありますが、YA 担当がオススメの本を（主観で）レベル別に分けてご紹介します。

レベル別読書のススメ

ショートショート・マルシェ

田丸雅智：著 光文社 2015年刊 Fタマ



ショートショート、というジャンルをご存知でしょうか。とても短くて不思議なお話で、短編小説とも違う独自のジャンルといえると思います。星新一さんが有名ですね。作者の田丸氏は星新一の孫弟子にあたるそうで、この本には「食」にまつわるショートショートが18編収められています。珍しいキノコ、鯛料理からチョコレートまでおいしいそうな食べ物がたくさん出てきます。どこから読んでも大丈夫なので、好きなものから味見をどうぞ。いろいろな味つけがあり、クセになるかもしれませんよ！

ホンダラケとは

本誌は、読者の身も心も「本だらけ」にしてやろうという心意気から生まれた中高生向け小冊子です。本誌に登場する本は全て三田市立図書館本館のYA(ヤングアダルト)コーナーでご覧いただけます。

2か月に1度、年6回発行予定です。

ホンダラケは皆様の投稿をお待ちしております。YAコーナーに用紙・ポストがございますので、おすすめ本や本誌の感想・要望などお寄せ下さい。

青春読書記

～三田学園図書委員会より愛をこめて～

今月のテーマは「恋愛」。

ストーリー・セラー

有川浩：著 2010年刊 新潮社 F/アリ

この小説は、『sideA』『sideB』の2つの物語でできています。

sideA：小説家の妻と、彼女の最初で最高の読者の夫

sideB：小説家の妻と、彼女をおちゃめに支える夫

そんな二組の夫婦を襲った悲しい運命。「sideA」では妻が、「sideB」では夫がたおれてしまいます。それでも悲観ばかりせずささえあい、自分たちらしく生きて、最後まで大切な何かを残してくれる、そんなところに感動しました。

P.N. 芹田 小凧 (中学1年生)



リサイクル予備軍 ~なぜ君は借りてもらえないのか~

家の顔

くうねるところにすむところ 13
子どもたちに伝えたい家の本

片山 和俊：著 インデックス・コミュニケーションズ 2006年刊

また忘れられたように棚の下の方にひっそりと立っていたこの本。建築に関する絵本のシリーズのようですが、「家の顔」とはいったい何なのでしょう？たとえば南米のコロンビアでは赤道に近く、高地の方が快適なので山沿いに家がつくられます。中国の南方には家を守るため客家土楼という何重にも壁で囲まれた家があるそうです。その土地の気候や環境などによって様々な「家の顔」が生まれるのです。建築家の片山和俊さんは今の日本の家は「どこへ行っても同じ顔」だといいます。確かに周りを見渡してみても人の暮らしが見える家ってあまりない・・・どころか隣の人が何をしているかも知らないかも？それって子どもたちにとって良いことなのだろうか。そんな風に考えさせられる絵本です。

NO
IMAGE

527/06

ホンダラケポストの投稿を紹介するコーナー¹⁵

P.N.：快斗さん

オススメ本：「拝啓、十年後の君へ。」天沢夏月 著 メディアワークス文庫
(株式会社 KADOKAWA アスキー・メディアワークス)

理由：桜色の色鉛筆とコバルトブルーのクレヨンが千尋と耀をつないでいたところにキュンとしました♡

いきなりネタバレ？な予感ですが、でもキュン♡が可愛いので許しましょう！小説読んでトキメクっていいよねえ。

そんな快斗さんからの追加コメントは、

「今中学ではやっているのは、ノゲノラとかソードアート・オンラインとか東方ですかね」

M 「???ソードアート…はわかるけど、のげのらって何よ？」

A 「それはきっとラノベの『ノーゲーム・ノーライフ』のことですよ。ちなみに所蔵していません」

M 「わかった！東方は『東方神起』ね！はっまさか『東方見聞録』？シブイわね」

F 「絶対違います。たぶん『東方Project』ではないかと」

M 「何ソレ??？」

F 「説明しているスペースがありません！たまには自分で勉強してください」

M 「あああ待ってえ。皆さん、説明付きで投稿してえ(涙)」



F/アマ 2016年

YA世代のために血を吐く思いで名作を紹介するコーナー

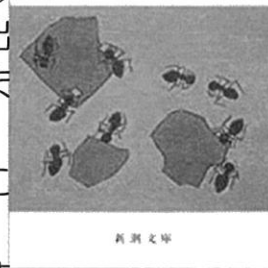
『城の崎にて』 志賀直哉著

新潮文庫 2005年刊

生きている事と死んで了っている事と、それは両極ではなかった。

「山の手線の電車で跳飛ばされて怪我をした」とまあ、衝撃の一文から始まるこのお話。即死じゃないとはすごいな!?という驚きはさておき、主人公の「自分」(おそらく志賀本人)は怪我の療養のために城崎温泉にやってきます。滞在中に出会うのは玄関先で死んでいた蜂の死骸。首に串を刺されたまま川に投げ込まれ必死で逃げる鼠。死んでしまうということ、なんとかして生きようとする動物の姿から静かに考える「自分」。生と死は近いのか遠いのか、そんなことを考えたことがないならなおさら、短いお話なのでぜひご一読を。意外に近い城崎温泉、力二と温泉と城崎の街並みにこの短編を思い出して欲しいと思います。

小僧の神様
城の崎にて
志賀直哉



F/シガ